ダン、エンブレム、マニエリスム

――機知の観察――

大熊　栄 著

白 凰 社

《著者略歴》

大熊栄（おおくま・さかえ）
1944年、埼玉県生まれ。東京教育大学文学部卒。東京都立大学大学院博士課程修了。國學院大学助教授を経て、現在、明治大学教授。
訳書　C.M. バウラ『現代詩の実験』（みすず書房）、マラカイ・マーチン『悪魔の人質』（集英社）、マイケル・ギルバート『十二夜殺人事件』『ケイティ殺人事件』（共に集英社）、A.J. クィネル『燃える男』『メッカを撃て』（以上、集英社）『スナップ・ショット』『血の絆』（以上、新潮社）、B. フリーマントル『十一月の男』『追いつめられた男』（共に新潮社）、モンタルバーノ&ハイアセン『皇帝の墓を暴け』（集英社）。

明治大学人文科学研究所叢書
ダン、エンブレム、マニエリスム
——機知の観察——
一九八六年八月一五日　第一刷発行
著者　大熊栄
発行者　高橋謙
発行所　株式会社白凰社
東京都千代田区神田神保町一—二〇
電話（〇三）二九一—七五七一
振替・東京八—九二二四一
印刷　星野精版印刷株式会社
製本　株式会社中西製本
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
ISBN4-8262-0065-X

ダン、エンブレム、マニエリスム

——機知の観察——

大熊　栄 著

白 凰 社

エル・グレコとキリスト　203
ニコラス・ヒリアードとマニエリスム　220
ダンと言語絵画　237
ジョン・ダン――求心的詩人　261
ピタゴラス神学――ダンの『魂の遍歴』　305
エピローグ　325
あとがき　330
参考文献　ix
索引　i

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プロローグ　7

I　ダンとエンブレム　15

1　エンブレムについて　16

2　『諷刺詩集』について　27

3　『エレジー集』について　42

4　『唄とソネット』について　69

5　機知について　109

II　ダンとマニエリスム　117

ポントルモの手紙をめぐって　118

ポントルモとスタイルの実験　149

パルミジャニーノの辞世　181

目

次

プロローグ

詩人ジョン・ダンはこの世紀の偉大な、そしてある意味では狡猾な詩人批評家の戦略のために永い眠りからたたき起こされたのだった。以後、この世紀におけるダン批評は《ダン同時代人論》として展開してきたと言っていいだろう。ようすが変わってきたのは一九六〇年頃からである。「マーツの仕事のあとではなおさら、かりにものを知った読者は一九二〇年代の多くの批評家のナイーヴで熱烈なしかたでダンやハーバートやその他の詩人に反応することはできない。われわれはもはや自分を瞞してこれらの詩人たちをわれらの同時代人として遇することはできない」[1] F・J・ワーンケは一九七〇年にそう言った。ルイス・L・マーツの『冥想詩研究』は一九五四年に初版が出たが、一九六二年にペーパーバックとなった。ちなみにジョゼフ・マツェオの『ルネサンスと十七世紀研究』およびマリオ・プラーツの『十七世紀イメージ研究』第二版増補版が出たのはともに一九六四年である。

《ダン同時代人論》は、しかし、一九二〇年代に始まったのではない。私見によれば、それはエドマンド・ゴスとともに始まったのである。彼の『ジョン・ダンの生涯と書簡』(一八九九)は世紀末的風土のなかに、もうひとつの世紀末の詩人を甦らせようとしている。シモンズ、ラスキン、ペイター、P・R・Bの画家たち、ホイッスラ

ー、ワイルドらが作り上げた風土の影響をゴスの伝記文学のうちに見つけることは、それほどむずかしくない。彼は胸の底で若きダンをデカダンと見なしている。ダンの「凪」から四行ばかり引用して「ここにはデカダンの端緒がある」[2]と言い、「無関心な人々」からは「放浪のヴェルレーヌ」[3]を連想する。ゴスはもうひとりのデ・ゼッサント、あるいはもうひとりのドリアン・グレイとして、ダンの肖像を描いているのだ。R・C・ボールドやジョン・ケアリーの実証的研究のあとでは、ゴスの伝記は空想的、あまりに空想的である。しかし、彼が世紀末の文学者としてダンへの熱い共感を寄せていることは否定しようがない。そしてここに、己れの文学的立場に忠誠を尽くしつつダンを語るという、《ダン同時代人論》の原型がある。

T・S・エリオットの「形而上詩人」は、一見すると、文学史の書き換えを命じているかのように見える。しかし事実はそうでない。そこにはエリオットの文学経験、コルビエールやラフォルグについての経験が語られているのだ。そしてダンに与えられたのはサンボリスト詩人の光彩である。イギリス文学はすでに十六世紀末ないし十七世紀初期にサンボリストの詩人を持っていたという印象を、この短いエッセイはわれわれの脳裡に強く焼きつける。

エリオットは十七世紀の感受性を現代詩人は再考すべきだ、と主張する。「十六世紀の劇作家たちの後継者である十七世紀の詩人たちは、いかなるたぐいの経験をも貪り食うことのできる感受性のメカニズムを持っていた」[4]エリオットがこのような感受性に注目したのは、もっぱら彼自身の詩作に必要なものであったからだ。

エリオットの場合、《ダン同時代人論》がとりわけ強調されているのは、死後三百周年記念論文集『ジョン・ダンのための花環』（セオダー・スペンサー編、一九三一）に収録されているエッセイで、「われらが時代のダン」というのが、ほかでもなくその表題である。

このなかでエリオットは「中世の詩人ダン」というイメージをむきになって払拭しようとしている。直接の動機

はメアリー・ペイトン・ラムゼイが一九一七年にフランス語で書いた論文『イギリス形而上詩人ダンにおける中世的教義』にたいする論駁にあるわけだが、それはただの口実だろう。「ダンがスコラ哲学をよく読んでいたことは疑いないが、フッカーよりもよく読んでいたとか、フッカーよりも中世の思想に深く影響されていたなどと仮定する根拠はない」とエリオットはまずラムゼイの結論を一蹴する。つづいて彼はダンを現代へ引き寄せようとするわけだが、その理屈を支えているのは「精神」と「気質」という概念の巧みな区分けである。「精神」を軽視し、「気質」を重視することによって、初めてエリオットの《ダン同時代人論》は完結する。彼の理屈を聞いてみよう——

「ダンの精神は決定的に彼自身の時代の精神だった。しかしその精神は哲学的、神学的であるよりもむしろ法律家のものであり、議論好きな精神であって、われらが時代に生きていれば彼はきわめて優秀な弁護士になっていたことだろう。

気質という点では、実際、ダンはスコラ哲学者の正反対であり、神秘家や体系的哲学者の正反対である。スコラ派の百科全書的野心はたえず単一化へと向けられていた。《集大成(スンマ)》が達成すべき目的であり、知識や実践の各分野は全体との関係を持つはずだった。ダンには思考と感受性の明らかな分裂がある。その亀裂の上にダンは詩のなかで独自な架橋を施しているが、その架橋のしかたはすでに中世の詩の方法ではなかった[5]」(傍点、筆者)

つまりダンの現代性は「気質」とか「感受性」といった天性的部分に依拠しているわけである。このように詩人の天性を問題にするのはほんとうの詩人にしかできない離れ業であり、たとえそこにダンへ接近するための気のきいたインスピレーションがあるとしても、詩人でないものには用のない言挙げである。従って、「精神」と「気質」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（あるいは「思考」と「感受性」）を区別するのはどことなく狡猾であり、「精神」を置き去りにして「気質」ばかりを重視するのは詭弁くさいなどと言ってみても始まらない。「形而上詩人」においてそうだったように「われらが時代のダン」においても、エリオットは多分に詩人としての自分自身の問題を語っているのである。そうした条件つきではあるが、「ダンの精神は決定的に彼自身の時代の精神だった」とエリオット自身が明言していることだけは記憶にとどめていいかも知れない。

キャスリーン・レインの「ジョン・ダンとバロック的懐疑」（『ホライズン』一九四五）も印象深い《ダン同時代人論》である。バロック期の詩人は歴史上最も激烈な変革の時を生き、中世と近代、精神的価値と物質的価値のはざまで深く苦悩していた、と考えるレインは「バロック詩人の偉大さ」として「どちらの種類の真理をも過小評価しなかったこと」を挙げ、そこに「わたしたち自身の状況の謎を解く鍵」[6]を見出したのだった。ちなみに当時はまだマニエリスムの概念が確立していなかった時期である。

「十七世紀においてダンをあれほどまでに強い影響力を持つ詩人とした卓抜な独創性のために、彼は直ちにわれわれにとっての同時代人になる――すなわち、明らかに生きている詩人、という最も重要な意味において」[7]

なるほどこれは《ダン同時代人論》かも知れないが、これまでのものとはいささかようすが違う。F・R・リーヴィスはダンの肉声（トーキング・ヴォイス）を聞いているにすぎない。ダンが生きていた時代においては、ある歴史家も言ったように、最上の詩は歌われるために書かれたのであって、そのような時代に書かれた詩に肉声が聞けるというのは意味がある。リーヴィスが強調しているのはその点である。

「音楽がすべての階級にとって日常生活の重要な一部分であり、詩人たちが大部分の同胞とともに音楽家であり、その抒情詩を歌われるために書くという時代にあって、ダンは音楽からきっぱりと決別し、それでいて詩と音楽の結合を主張するような詩形を使った。音楽からの決別は疑いのないところで、言葉、調子、抑揚は肉声のそれである」[8]

そう言われてみると、活字の向こうからダンの肉声が聞こえてくるような気がする。歴史的背景を考慮しながらダンの肉声に耳を傾けることは、単にそこに「急迫感」や「累積的効果」や「劇的と呼んでいいなにか」を確認するだけでなく、《われら》から《かれら》の視点へ移るための前提でもある。

《かれら》の側に立ってダンの詩作を読むという作業は、当時最も重視されていた詩的才能としての機知(ウィット)について考えることにほかならない。ダンとその一派は後世の古典主義詩人たちから非難の集中砲火を浴びるが、良識のない機知という台詞が非難の切り札だった。一方、ダンは同時代人たちから「機知の王国の王」などともてはやされた。この機知は奇想(コンシート)と不可分の関係にある。「機知の王国」は奇想から成り立っていると言っても過言ではない。グラシアンによれば、奇想とは「オブジェ同士の間に見出される照応」であり、それを素早く認識する「悟性の行為」が機知というわけだ。

ダンの詩は奇想にこと欠かない。ほとんど病的なほど奇想だらけである。そこで問題は、ダンはこれほどの奇想をどうして思いついたのかということになる。これを単に天才的な思いつきとして片づけずに、当時の文学的風土からの影響と考えた場合、急速に浮かび上がってきたのがエンブレムである。十六世紀のヨーロッパにおけるエン

ブレムの大流行が、ダンに限らず、およそ奇想に縁のある詩人たちの生みの親だという事情はかなり前から明らかになっている。それを明らかにしたのはマリオ・プラーツである。

一方、エンブレムの流行は、ポントルモからエル・グレコまでと言われるマニエリスムの時代と重なり合っている。当然そこに類縁関係が予想されるが、実際問題としてエンブレムとマニエリスムは機知の名において同質なのである。もとよりその機知は、古典主義者の言う良識（グッド・センス）に欠け、ノンセンスの相貌を呈している。そのためにかつてはマニエリスムは《頽廃》と同義語だったが、最近では蔑称としてでなく、まっとうな様式概念としての市民権を獲得するに至った。ノンセンスの機知と見えるものは、そうでなければ表現しえない新しい精神状況の出現に見合った、新しい芸術形式と考えられるからである。

ジョン・ダンは持ち前のアンテナの感度がよすぎたためにシドニーやスペンサーにはなかった新しい精神の持主となり、そのために新しい表現形式を必要としていた。《形而上詩》と渾名され、いまやマニエリスムの概念に包摂されようとしている彼の詩は新しい形式を独自に模索した結果にほかならない。

註

(1) F. Warnke, 'Metaphysical Poetry and the European Context,' *Metaphysical Poetry* (London, 1970), p. 263.

(2) Edmund Gosse, *The Life and Letters of John Donne* (Gloucester, Mass., 1959), Vol. I, p. 50.

(3) *Ibid.*, p. 65.

(4) T. S. Eliot, 'The Metaphysical Poets,' *Selected Essays* (London, 1972), p. 287.

(5) T. S. Eliot, 'Donne in Our Time,' *A Garland for John Donne*, ed. by Theodore Spencer (Gloucester, Mass., 1958), p. 8.

(6) Kathleen Raine, 'John Donne and the Baroque Doubt,' *Horizon*, LXVI (1945), p. 371.

(7) F. R. Leavis, *Revaluation* (New York, 1963), p. 11.

(8) *Ibid.*, p. 11.

I

ダンとエンブレム

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com